聞いてみるよ

浅黄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聞いてみるよ

【Ｎコード】
Ｎ６０７１Ｌ

【作者名】
浅黄

【あらすじ】
ある学校の軽音楽部の話です。
部員は４人。

明るい真面目、ハルヒ。
軽音楽部唯一のトークメーカー、ヒロ。
無口でクールな、シュウ。
紅一点で姉御肌、ケイ。

軽音楽部が演奏する曲はいつも誰からも理解されることが無く、学校中から「騒音部」と呼ばれるほど。

それでも、バンドは止めねぇ！

そんな彼らの日常を切り取ってみました。

それぞれの視点から、
基本一話完結で話が進んでいきます。

暇つぶしなどにどうぞｍ（＿＿）ｍ

01：じゃあ、歌おう（前書き）

前書き、ですか…
そうですね
警告する点は

・文章が下手！ｏｒｚ

・作者が変だ
・作者はぬいぐるみを本気で口説き落とそうとした
・作者は変人だ

変人でスマソ…

以上が大丈夫な方はｏｋだと思います

暇つぶしなどにどうぞｍ（＿＿）ｍ

01：じゃあ、歌おう

夏の暑さなんて吹っ飛ばすくらい、俺らは爽やかで、輝いていた。

なんてな。言ってみただけだ。

このクソ暑い部室で爽やかに過ごすなんて無理に決まっている。

部室は5畳半くらいの広さで、防音設備がそこそこに整った部屋である。

そこそこ、な。

言わなくても「防音設備」とかゆー単語で分かるかもしれないが、

俺はこの学校の軽音楽部に所属している。

部員は4名。

この部は廃部寸前で、新入部員は募集していない。

というより、生徒会やら何やらが募集させてくれなかったんだ。それで、俺らが卒業したら軽音楽部は無くなってしまう。

部として、認められてないらしいな。

まあ、うるさいし、音楽は何かと金がかかるし…

学校側から見ればいいところとか無いよな。

うちの学校の生徒が、我らが軽音楽部の事を何て言ってるか知ってるか？

「騒音部」

そうおん！？

「軽音部」ならぬ「騒音部」ですか。

いやぁ～、全くもってそのとおり！分かってるじゃねぇか！

俺らが奏でる音は騒音以外の何でも無い。

いっその事、騒音部に改名しようか。

そう思ったりもする。

…嘘だ。
そんな事思ってない。
俺は真剣に音楽をやっている。
他の部員達もそうだ。
それを騒音と呼ばれるのがどれだけ悔しい事か…
その計り知れない悔しさを例えにするなら、そうだな…
悔しさのあまり、ハンガーで壁を開けられるほどだ！
いや、実際には開けて無いけどな。
でも、どれくらい悔しいかって事は伝わるだろ？
カツカツと、乾いた音が４回続けて聞こえた。
何の音だ？
俺は周りを見回した。５畳半というスペースにドラム、アンプ、ミキサーが詰め込まれている。
左利き用のギターを持った黒髪の男が俺に話しかけてきた。
「ヒロ、どうしたんだ？」
ヒロってゆーのは俺のニックネーム。宏孝（ひろたか）だからヒロ。
「え？何が？」
黒髪の男は俺の言葉に眉を寄せた。
この黒髪はこの部の部長だ。要はこのバンドのリーダーって事だな。
性格は、明るい真面目というところか。
晴彦（はるひこ）って名前だからあだ名はもちろん「ハルヒ」だ。
別にこいつは世界を大いに盛り上げるための団とかは作っていない。
でも、まあ変わってるんじゃないかなとは思う。天然ボケなのかな、こいつは。
芸術方面は変わったヤツばっかだし、それはしょうがないとする。
「何ボサッとしてるの？」
今度はドラムセットの前に座っている長髪の女が話しかけてきた。
彼女は呆れた様子で、ドラムのスティックをこちらに向けている。
この長髪のことは「ケイ」って呼んでる。本名、何だったかな？
仲が悪いわけでは決してないが、皆が「ケイ」としか呼ばないから

結局知らない。
今更聞けないしな。
今度こっそりハルヒに聞いとくか。
「ボサッとって…」
何の話だ、と続けようとして俺は言葉を飲んだ。
今、そういえば　合奏（セッション）中だったな。
俺はマイクを指でつつくと言った。
「俺の歌を聴けぇぇぇぇぇ！！」
「だったら早く歌えよ」
ケイは、苦笑を浮かべた。
今やっている曲はボーカルの短いセリフから始まる曲だ。
これ以上ふざけるとケイが本気で怒り出すので止めておこう。
ケイは怒ったらかなり怖い。
歌い始めようとしたけど、空気が悪かった。
ベースを持ったツンツン頭が一人で勝手にベースの練習を始めている。
ツンツン頭は無口で、俺とかハルヒとかとは違い、いつも冷静だ。
修也（しゅうや）って名前だから「シュウ」って呼んでいる。
皆の事「黒髪」とか「ツンツン頭」とか言ってるけど、そう言う俺は金髪なんだよな。
正確には金ではないけど、かなり色素が薄い。黄土色みたいな感じだけど、皆には金髪と言われる。
これは先天的なものであって、別に染めたわけではない。
でも、まあ、相手に与える第一印象は良く無いものなのかな、と思う。
俺が歌い出せないでいると、ハルヒがそれに気付いた。
「シュウ、セッションするぞ」
ハルヒが言うと、シュウはベースを弾く右手を止めた。
俺は目を瞑り、大きく呼吸をすると短いセリフを丁寧に吐き出した。
「回避不可能、生き残るために」

一見カッコ良さそうにも思えるが、よくよく考えるとクレイジーなセリフから始まるこの曲はリーダーのオリジナルだ。
やっぱりアイツ、世界を大いに盛り上げるための怪しげな組織を結成したいとでも思っているのか？
そう思ったりもした。
しかし、オリジナルをやりたいと言い出したのは俺で、作詞・作曲をハルヒに押し付けたのも俺だ。
セリフの次にすぐドラムのハイハットのカウント。
そうしないと合わせにくいからか。
ギターの激しいリフと、身体の芯まで震わす様なベース。
それを支えるドラム。
全てが俺にとって心地良い。
「全てを抱えるような夜に　切り裂いてゆく　言葉と心が
笑った声で泣いた君　何故一人きりでここに居るの？」
アップテンポな曲しか基本的に俺らはやらない。
この曲のテンポは今までやってきた曲の中でもかなり速い。
それなのに、３人とも安定してるな、と俺は感心した。
「広い世界で　変えられぬ意志を　誰に託したの、と
問いかけたのは　君？夢、幻、現実…」
Bメロの終わり。いよいよサビに突入って時に、部室に誰か入ってきた。
一瞬で俺らの部室から音が消えた。
部室に突然入ってきた人物は腰に手を当て、何やらご立腹の様だ。
「あなたたち、うるさいわよ！もっと静かに出来ないの？」
この部に所属して１年半、一度もこうやって軽音楽部に「うるさい」と直接文句を言いに来た人間はいなかった。
「私たち書道部が集中できないでしょ！？文化祭に出品する作品を仕上げなきゃいけないの！」
気の強い書道部員女子１名に、軽音楽部員男子３名女子１名は唖然

としていた。
気の強さならケイだって引けを取らないはずだ。
さあ、ケイ、何か言い返してやれ。
しかし、ケイも唖然としたまま動かない。
そこで、代わりに俺が口を開いた。
「えーっと…、うるさいって…」
「うるさいものにうるさいって言ったら悪いの!?」
書道部員は相当お怒りらしい。
目を吊り上げ、俺を睨み付ける。
「大体何なの?うるさくてよく分からない音楽ばかり演奏して!そんな事するのに何の意味があるの!?」
書道部員は更に声高に続けた。
「今やってる曲だって、意味分からないわ!!」
「何だと!!?」
俺は声を荒げた。
「もういっぺん言ってみろ!!」
俺の怒鳴り声に、書道部員は怯むことなく更に不快そうな顔をした。
「ヒロ」と、ハルヒが俺を呼ぶ声が聞こえたが、今の俺は返事をするどころでは無い。
「お前らみたいに自分じゃ何も創り出せないヤツには言われたくねぇ!!」
書道部員につっかかっていく俺を、ハルヒが必死に止める。
ハルヒの愛用ギターはいつのまにかスタンドに立てかけてあった。
「落ち着けよ、な?」
ハルヒに後ろから掴まれた腕を振りほどこうとこうとしたが、ハルヒは見た目によらず、結構力がある。
「あなたが部長なの?」
書道部員はハルヒに視線を合わせ、言った。
「そうだけど?」
ハルヒの声は落ち着いている。

「いい加減、皆迷惑してるんだから、早く軽音楽部を解散させてちょうだいね」
書道部員はそういい残すと、部室から出て行った。
「おい待て！」
俺が言葉を言い終わる前に部室のドアが閉まった。
俺は腕を掴んでいるハルヒを振り払った。すると、ハルヒは尻餅を着いた。
「痛って…」
そう言い、ハルヒは尻をさすった。そして、大きなため息を一つつき、乾いた笑い声を上げた。
別にハルヒは何かが可笑しくって笑ってるわけじゃない。
自分の感情や、そういったものを誤魔化している。
俺には分かる。多分、ここにいる皆も分かっているんじゃないかと思う。
ハルヒは笑うのを止めると俯いた。
笑うのを止めた瞬間の顔を、俺は見た。
悔しそうで、今にも泣き出しそうな表情。
こんな顔をしたハルヒを見たのは久しぶりだ。
前に見たのは本番が練習どおりには上手くいかなかった文化祭の時だった。
上手くいかなかった事に責任感じて泣いたんだっけな。
真面目だからな、ハルヒは。
「…悪いな、皆」
ハルヒはそう部屋から出る前に言った。
俺はその場にたたずんだまま動けなかった。
ケイも、いつもあまり表情を顔に出さないシュウも、悔しそうな面持ちでいた。
さっきから騒がしい俺に、シュウは落ち着いた声で言った。
「リーダーを、探さなくていいのか？」
ケイはドラムのスティックを置き、部室の出口に向かった。

「私は学校で探すから、シュウはリーダーの家に行ってみて。ヒロはハルヒの行きそうなとこ。今日はもう解散」
ケイはこの部の仕切り屋だ。
いつも的確な指示に感謝してる。
ハルヒの行きそうな所って…
俺の探す場所だけ範囲が広くないか？
実に抽象的だ。
それでも、ハルヒがちょっと心配だから探しに部室を出る。
あいつの行きそうなとこはだいたい見当がつく。
俺は走って学校を出た。
そのまま走り続け、息が上がって走れなくなる前にある場所に着いた。
何も無い、ただのベンチと大きな木が一つずつあるだけの公園。
この場所で、俺とハルヒは小学生の時に出会った。
ハルヒは確かその時、家出してたんだっけな。
それで公園でホームレス。なかなか笑わせてくれるじゃねぇか。
まあ、家出は一日も持たず、結局はすぐに家に帰っていったけどな。
芝生の上に、ハルヒは仰向けになって倒れていた。
「ハルヒ」
ハルヒは俺に返事をする様子を見せず、目に腕を乗せたまま動かない。
俺はハルヒの隣に座り込んだ。
芝生がチクチクと俺の尻を刺す。
しばらく無言が続いた後、ハルヒが口を開いた。
「俺さ、皆にこんな惨めな思いさせて、どうしたらいいんだろうな」
独り言のような小さな声だった。
「皆、一生懸命やってんのに、俺がしっかりしないから…」
ハルヒが悪いわけじゃない。そう伝えようと思ったが、何と言えばいい？
俺が言葉に詰まっていると、ハルヒは続けた。

「俺、部長としてやっていく自信無ぇよ…。このままやって皆に辛い思いさせるくらいなら」
ハルヒが言葉を続ける前に俺が口をはさんだ。
廃部にするとか言いそうだったから、それだけは言って欲しくなかった。
「何バカな事言ってんだ?辛くなんか無ぇよ。皆好きでバンドやってんだ。」
何となく、空を見ながら言った。
どこに視線を持っていったらいいか分からなかった。
真っ青だな。雲がほとんど無い。空と雲の割合9：1。本日は快晴だ。
「お前が一人で責任感じる事は無いしさ。言わしとけばいいじゃん、騒音とか、何とでも」
さっきまで書道部員に一番腹を立てていた俺が言うセリフじゃないけど。
「そうおん!とか良いじゃん!ｓｏ－ｏｎ!何か始まりそう」
自虐的になってるな、俺。
「どっかに、俺らの事認めてくれるヤツがいるよ。絶対に」
この辺で、俺の必死さが良く伝わってくると思うが、この時は何も考えずに喋ってた。
こんな話の内容じゃ、軽音楽部トーク専門係の名が折れる。
俺が景気付けに即興した曲を歌うと、ハルヒが笑った。
「何だよ、その曲。お前、本当センス無いよな」
「うっせーな」
言われなくても分かってるよ、そんな事。
ハルヒは明るく笑い続ける。
「ヒロ、ありがとな」
ハルヒは顔から腕を退けると言った。
空が眩しくて、ハルヒは目を細めた。
俺はハルヒの眩しい笑顔をから、ハルヒが元気になった事を確認し、

立ち上がった。
伸びをした後、俺は言った。
「俺、お前の作った曲、若干クレイジーだと思ったりしたけど、実は結構気に入ってる」
書道部員がハルヒの曲についてバカにしたのは正直一番許せなかった。
その事をハルヒが気にしてるんじゃないかと少し心配だった。
ハルヒは、何だよ突然、と笑った。
「そうか、良かった。気に入ってくれてるんだな」
ハルヒは明るい声で言った。
「書道部のヤツが言ってた事、気にすんなよ？」
「おお。気にしてなんかねぇよ」
ハルヒは目をゴシゴシと擦ると足を振り下ろした勢いで起き上がった。
「文化祭まで近いし、練習するか」
ハルヒはハツラツと立ち上がり、公園を出た。
俺の隣をを通り越すときに、ハルヒが小さな声でつぶやく様に
「今年のが、俺たちの出られる最後の文化祭だもんな」
と言ったのが、俺の耳に入った。
引退まで一年も無い。
そう実感させられる言葉だった。
今月もあと数日しか残っていない。
夕日がゆっくりと、でも確実に沈んでゆく。
既に、東の空の方は空が紫がかっていた。
俺は、オレンジ色の空がどんどんと暗くなっていくのを見つめていた。
どんなに楽しい毎日にも終わりが来るんだという事が、俺にとって何よりも胸を痛める原因となった。
でも、どうしようもないもんな。
俺はハルヒを追いかけると、背中を思い切り叩いてやった。

「痛」
「せっかく探しに来てやったのに、何で俺を置いてくんだよ？」
ハルヒは笑い、「それもそうだな」と言った。
俺は夕日が沈んでいくのを、眩しくて目を細めながら見た。
「次の演奏（ライヴ）、絶っっ対に成功させような」
「おう」
ハルヒは言うと、夕日に手をかざした。
「眩しいな。早く沈めばいいのに」
「何だとっ！？」
俺は沈んで欲しくないと思ってたのに、何を言うんだコイツは。
「沈むな！！夕日！！」
「何でだよ？」
今日が終わってしまうのが、何となく怖かった。
そう思ってるのは俺だけなのかな。

01：じゃあ、歌おう（後書き）

初投稿作品でした＾＾
どうも読んでくれた方、ありがとうございます。

さて、ここで作者として何が書きたかったのかというとですね、ズバリ
「終わってしまう事の切なさ」です。

分かりにくいですね
スミマセン。。。

本当はね、
「理解されなくても、進め！ＭＹ　ＷＡＹ！！」とか、
「持つべきものは自分が落ち込んでいる時に懸命に励ましてくれる友人なんだ！」とか、
いろいろ書きかけたんだ。

けど挫折（＾―＾；）
自分には課せられた荷が重すぎたようだ

因みに、ヒロが即興した曲←

うるさいってゆー　お前らがうるさいんだ
静かにしやがれ　クールになれよ

理解されにくい音楽でも　だいっじょぶっさ
ノープロブレム！！
他人なんて～さ　関係ない　無い　ナイ
勝手に　ほざいてろって感じ

頭を冷やすんだ　耳をかっぽじれ
聞こえるか　俺の歌

わっしょい　わっしょい　元気出せ
わっしょい　わっしょい　朗らかに

わっしょい　わっしょい　元気出せ（大事な事なので二回言います）
わっしょい　わっしょい　楽しいな

今日も皆で大☆合奏！！

いやぁ～ここまでセンスが無いとは困りますね
彼の美意識を疑う前に、彼の知的感覚を疑いたい

02：じゃあ、言おう（前書き）

若干の恋愛要素を含むかもしれません。
そんなの読んだら体中が痒くなるわい！

という方はお気をつけ下さい（＾―＾；）

相変わらず下手な文章ですが、おヒマでしたらどうぞｍ（＿）ｍ

02：じゃあ、言おう

今日、ある事件が起きた。
他人からすると、事件というほどでは無いのかもしれない。
けど、私にとっては立派な事件だった。
何が起きたのかと言うと、私の友達全員が軽音楽部のメンバーの事が好きらしい。
好きっていう気持ちは私にはよく分からない。
多分少女マンガとかである、胸がどきどきするって感覚のことなのかな？
それが好きってこと？
話は戻って、私の仲の良い友達は3人いる。
3人のうち一人がハルヒの事が好きで、もう一人がヒロの事が好き。
もう一人はシュウの事が好きらしい。
うちの軽音楽部は残念な事に皆から「騒音部」と呼ばれている。
でも、女の子達からすると、「騒音部の男子って、レベル高いよね」らしい。
何のレベルなのか、と聞くと「顔」という返事が返ってきた。
ああ、そういう事か。
うちの部員は最低でも並の上の顔らしい。
それで、やっぱりか、と思われるかもしれないけど私はある質問をされた。
「ケイは、いつも皆と一緒にいるけど、3人の内で誰か好きなんじゃないの？」
この質問に私は困った。
「え、いや。どうなんだろ…」
正直言って、皆好きだ。
ひょっとしたら大が付くくらい好きかもしれない。
そんなこと、一度も考えなかった。

私が考え込んでいると、友人たち3人は顔を見合わせた。
「好きじゃないの？」
「え、そりゃ好きだよ？でも、皆が言ってる好きとは違う」
私が言うと、3人は安心したらしく、ため息をついた。
「良かった～。ケイが誰かの事好きだったら勝ち目無かったし」
私はアハハと乾いた笑い声を上げると、言った。
「それで、頼みがあるって言ってたよね？」
「そう！それよ！！」
私の言葉に友人は思いのほか食い付く。
私の両手を取ると、友人は言った。
「3人をね、デートに誘って欲しいの！！」
「はい？」
「こっちは3人、あっちも3人。ピッタリでしょ？」
そんな面倒くさい事は御免こうむる。
でも、友人のキラキラ輝く目を見ると断れなかった。
「い、いいよ。誘っとく」
「ありがと～っ」
友人は私に抱きついた。
暑い。
でも、離れろ、とは言わなかった。

部活の時間、いつも一番に黒髪の男が部室にいる。
彼は椅子に座り、一枚の紙と格闘中だった。
黒髪の男は左手にペンを持ち、何やら取り込み中だ。
私はリーダーのすぐ後ろに立ち聞いた。
「何やってるの？リーダー」
リーダーは「ん～？」とか言いながら私を振り返った。
「文化祭のチラシ。客をたくさん呼ばねぇとな」
リーダーの名前は晴彦という。
だからあだ名はハルヒ。

今日は黒縁めがねをかけている。
最近目が悪くなってきたとか言ってたっけ。
あだ名はヒロという金髪の部員がつけた。
「そうだね。今年で文化祭ライヴが出来るのは最後だもんね」
私が言うと、リーダーは寂しそうに笑った。
「だな」
友人の依頼を実行すべく私はリーダーに聞いた。
「そういえばさ、日曜日、ヒマ？」
「う～ん。まぁ、ヒマっちゃヒマかな」
私のいつもと違う様子に気が付いたか、リーダーは首を傾げた。
「どうした？何かあるのか？」
リーダーはよく身の回りに気配りが出来ると思う。
小学校の頃からの友達でも分からないくらいの気持ちの変化も、リーダーはすぐに読み取れる。
「あのね、私の友達が日曜日にね」
別に、自分は誘うだけだと分かっているものの、恥ずかしさから少し口ごもってしまった。
「デートしようって…」
語尾になるにつれてどんどん声が小さくなる。
聞き取ってもらえたかどうか不安になった。
もう一度言うのは恥ずかしい。
リーダーは目を丸くし、椅子から転げ落ちた。
「なっ、なんだ、それ！！？」
リーダーはずり落ちためがねを頭に掛け、倒れた身体を起こした。
「俺が！？」
「うん…。後、ヒロとシュウも一緒に」
私が言うと、リーダーは安心したようだ。
「皆一緒か…。なら大丈夫だな」
リーダーは皆と一緒なら何でも出来ると考えているらしい。
「あれ？ケイは行かないのか？」

「うん。私は行かない」
私は顔の前で手を振り、否定をした。
「そっか。で、どこに行くんだ？」
「えっとね、遊園地だったかな」
リーダーはなるほど、と頷いた。
「遊園地か。でもな～」
リーダーは机につかまり、立ち上がった。
「ケイが居なかったらつまらねぇし」
え？それってどういう事？
友人が変な事を聞いたりするから、妙に心臓が高鳴ったりする。
「やっぱ、４人そろわないとな。なんでケイだけ行けないんだよ」
ああ、ですよね。
この一言で恋愛フラグはあっけなく壊された。
「いや、友達は3人だから人数を合わせなきゃいけなくて」
デートっていう事、分かってるのかな？この人。
「行けないかな？」
「う～ん、ケイの頼みだしな。断れん」
リーダーが首を立てに振ると、ちょうどいいタイミングで金髪の少年とツンツン頭が部室に入ってきた。
「何の話してるんだ？」
金髪のヒロがイタズラっぽく笑いながら言った。
「まさか、デートのお誘いだとか？おアツいね～」
ヒロはヒューヒューとか言ってはやし立てる。
なんて鋭いヤツ。
でも、まあちょっと違うかな。
別に私はリーダーに恋愛感情とかそんなものを抱いているわけではない。…多分。
「ああ。デートだ。お前ら2人も行くぞ」
リーダーの言葉にヒロはギョッとし、呆れた。
「はあ？何言ってんだコイツ？」

私はただ笑うしかなかった。
「私の友達がね、軽音部3人と行きたいって」
「3人って、ケイは行かないのか？」
うん、まぁ。と私が頷くと、ツンツン頭が言った。
彼の事はシュウと呼んでいる。
「俺は行かない」
そう言うと思ってた。
シュウはこういう事に興味なさそうだし。
「そこを何とかしてもらえたら嬉しいな」
私が言うと、シュウはツンと顔を背け、ベースの練習に向かった。
「まぁ、シュウの事は俺に任せとけって」
ヒロは明るく言うと、リーダーにちょっかいをかけに行った。
「断ったら、お前が困るんだろ？」
ヒロはリーダーから取り上げた眼鏡を掛けながら聞いた。
「うん」
確かに困るよ。
けど、皆にはデートとかそういうのに行って欲しくないというのが本音だ。
もし、3人に恋人が出来たら、友達や部活より恋人を優先してしまうようになるのだろうか。
それで、私なんかかまって貰えなくなったりするのかな。
それは寂しかった。
皆そういう年頃なんだよね。
自分が変わってるだけで、好きな人の1人や2人いたっておかしくは無い。
好きな人を思い浮かべることが出来ない自分。
友達と比べると、私は褪せてるのかな。
日曜日が怖い。
皆が変わってしまうような気がして。
皆に変わらないでいて欲しいと思う私は、欲張りだよね。

０２：じゃあ、言おう（後書き）

何が言いたいのか相変わらず分かりにくい文章でごめんなさい。
一話目はヒロ。
二話目はケイ視点で書きました。

何が言いたかったのか、というかやりたかったのかというと、
部内で恋愛フラグを立てたかっただけです。

あ、あと、リーダーのメガネ属性もきっちりと書きたｋ（ｒｙ
ただそれだけです。

次話はシュウ視点でデート編になるんじゃないかな、と。

読者は皆俺の嫁！！

読んでくださった方、ありがとうございます。

03：じゃあ、歩こう

何で俺はこんなとこにいるんだろう…？
じりじりと暑い秋の日差しが俺をやきつける
ギャアギャアと隣で騒いでいる金髪を、「静かにしろよ」と黒髪がなだめる
俺たち3人の後を俺たちと同い年くらいの少女たちがついて来る
俺たちは6人で遊園地に来ている
何故来たのか、俺は確か金髪のヒロとスタジオに行くと約束をしたはずだった
なのに行き着いた場所は遊園地
ヒロはもともとここに俺を連れてくるつもりだったらしい
俺はこんなとこ来たくは無かった
人付き合いはハッキリ言って苦手だ
「おい、シュウ」
ヒロが俺に話しかけてきた
「今から2人で行動だってさ。くじ引き」
ヒロの拳からはみ出たつまようじの束の中から1本を引き抜いた
「赤」
俺は短く一言言うとヒロにつまようじを返した
「ってことは…」
1人の少女と目が合った
見覚えのあるその顔を驚きの表情に変え、少女は言った
「シュウも赤？」
「ああ」
少女は俺たちのバンドのメンバー、ケイだった
「お前、来れないんじゃなかったのか？」
ケイは小走りで俺に近づいてくる
「うん。来る筈だった子が急に行けなくなっちゃって、代わりに来

た」
俺はふーん、と気の無いような返事をした
実際は知らない女と一緒に過ごすよりはケイの方が過ごしやすく、心強かった
「よろしく」
ケイは俺に手を差し出した
俺は黙ってケイに手を差し出し微笑んだ
「ああ」
ヒロは大人しそうな女の子とペアになっていて、黒髪のハルヒは積極的な女の子とペアになっていた
ハルヒは腕を引っ張られながら俺たちの元から去っていった
ヒロはそんなハルヒを笑いながら「頑張れよ」と声援を送り、女の子が行きたいと言っていた店へと向かった
ヒロはバンドのムードメーカーだ。悪い空気になったときはいつもこいつが立ち直してくれる
また、ヒロは人見知りをせず、誰とでもすぐに打ち解けることができる
そういうところは、少し羨ましかった
「私たち、どうする？」
ケイは俺の方を覗き込みながら聞いた
「どうするって…」
俺は、ケイが満面の笑みを浮かべている事に気が付いた
「何でそんなに楽しそうなんだ？」
俺が言うと、ケイは顔に手をやった
「え？」
俺はケイがおかしくって少し笑うと言った
「別に、気にしなくてもいいぞ」
「だって、かっこ悪いじゃん一人だけにやけてて…」
「…まあ、な」
俺は一旦ケイから視線をはずし、空を見上げた

真っ青な綺麗な空だった
前に綺麗だと思った空は真っ赤だった
「せっかくだし、どっか行く？」
ケイは俺より先に歩いて聞いた
「そうだな」
俺が言うとケイは振り返った
ふわりと長い髪がゆれる
「行きたいところ、ある？」
俺はケイの隣に並び、歩きながら言った
「お前の行きたいとこでいい」
俺が言うとケイが笑った
「何だよ…？」
「『別に…』とか答えるかなって思ってたから意外だな、って」
確かに、昔の俺ならそう言っただろうな
俺はケイの横顔を見つめながら思った
ケイって思ってたより子供っぽいところがあるんだな
「じゃあ、乗り物とか乗ろうよ」
「ああ。問題無い」
ケイは嬉しさで目を爛々とさせながら、また俺より先に歩いていった

昼飯をはさんで、俺たちはたくさんアトラクションに乗った
ほとんどがケイの希望したものだが、それでも俺は全然かまわなかった
「ハルヒがシュウのこと一番頼りにしてるって言ってたよ」
ケイは手に持っていたオレンジジュースを置くと言った
「俺のこと…？」
「そうそう。『だけど俺は頼りないからかシュウには冷たくされて

ばっかだなー』ってため息ついてた」
俺はハルヒのことを頼りにしていないわけではない
むしろ、ハルヒのことは一番頼りにしている
廃部寸前の部をこうして無理をしながらも支えているのだ
だから、ハルヒには感謝しているし、それに――
「違う」
気づけば俺は声を上げていた
「俺は、ハルヒを頼りにしてないわけじゃ…」
「分かってるよ」
ケイは笑うと続けた
「だからリーダーに言ってやった。それは違うよって」
俺は視線を落とした。
別にハルヒに冷たくした覚えも無い。
ただ、俺は皆みたいに優しく声をかけたり、気さくに遊びに誘ったり出来なくて――
俺が話しかけたら相手が嫌な顔するんじゃないかといつも不安だった
初めて俺は自分の不器用な性格を後悔した
「リーダーは私たちのこと良く分かってるからね。大丈夫だよ」
「…そうだな」
俺は頷くとそのまま顔を伏せたままでいた
心配そうにケイが声をかけてくるのが分かる。
でも、目から熱いものがあふれてくる
泣きたいわけじゃない。泣きたくない。なのに涙が止まってくれない
「……俺は最低だ。いつも自分のことばかり考えて」
ケイは同情のそぶりを見せず、落ち着いた声で言った
「大丈夫。まだ間に合うよ。皆シュウが本当は優しい子だって知ってるから」
滲んだ景色はとても綺麗だった
驚くほどに、それは俺の心を落ち着けてくれた
俺は片手で涙を拭いながらケイにひとこと言った

すると、ケイは微笑んだ
はにかんだような、ふわりとした笑みだった

03：じゃあ、歩こう（後書き）

二人を良い雰囲気にしてやろうとたくらんでたんだけど駄目だった
これは…！デートじゃない！
シュウは想像以上に動かしにくかった

最後のシュウのひとことはご想像にお任せしますね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6071l/

聞いてみるよ

2010年10月9日19時51分発行